駒澤地理 No.38 pp.21～51, 2002
Komazawa Geography

戦後日本の宗教地理学 ― 宗教地理学文献目録の分析を通じて ―

小 田 匡 保

Ⅰ. はじめに

筆者は前稿[1]で，人文地理学会編『地理学文献目録』第７集～第10集を用いて，1977年以降における日本の宗教地理学の動向を検討した。本稿はその続編であり，『地理学文献目録』第１集～第10集のすべてを利用して宗教地理学文献目録を作成し，その数量的分析を通じて，戦後日本の宗教地理学の研究動向について考察しようとするものである。

日本における宗教地理学の展望論文には，筆者の前稿以外にも既に当麻[2]，松井[3]のものがある。それらは，通常の展望論文がそうであるように，執筆者が重要と判断する研究テーマをいくつか掲げ，それに属する文献を紹介し，著者のコメントを加えている。当麻論文は記述が宗教伝播や宗教社会学的研究にかなり偏っているが，松井論文は，日本の宗教地理学研究が，研究対象から①風土・自然環境と宗教，②都市・村落景観と宗教，③巡礼，④宗教の分布・伝播と空間構造という４つのテーマに分類できると述べ，それに該当する文献を紹介していて，日本の宗教地理学を概観するうえで有用なものである。

しかし，日本の宗教地理学研究が上記の４つのテーマに集約できるとする松井の指摘には疑問が残る。たとえば，霊山に代表される聖地の宗教景観の研究を②の「都市・村落景観と宗教」に包含させることには違和感を覚えるし，また，墓地に関する研究はまったく取り上げられていない。前者は研究をどのように分類するかという解釈上の問題であり，ここではこれ以上言及しない。後者は，墓地は「宗教」ではないとして意図的にはずしたのかもしれないが，このような，漏れ落ちている研究があるのではないかという疑問は，展望論文に生じやすい。

後者のような疑念が生まれる原因は，個々の研究に対する評価の違いなどとともに，展望論文の著者と読者が共通の舞台に立っていないためである。より具体的に言えば，宗教地理学の研究動向を論じる基礎になる文献リストを著者と読者が共有していないためである。通常，展望論文の著者と読者は，関係文献を同じように知っていることが暗黙の前提となっている。それをどのように分類・整理するかで，展望論文における動向把握のオリジナリティを出すことができる(もちろん他分野の読者に対しては，文献情報の提供という側面もある)。しかし実際には，著者と読者が同じ舞台に立っていないために，取り上げられていない研究があるという「ないものねだり」の疑問が生じることになる。

そこで，本稿ではまず，議論のたたき台となるべき宗教地理学文献目録を作成し公開するこ

とを第一の目的とする。地理学の主要な分野に比べれば，宗教地理学の文献数は相対的に少ないが，しかし，戦後50年以上の間に蓄積された宗教関係の地理学研究は，かなりの量に達する。後から詳述するように，筆者が本稿の作業でリストアップした文献数は400近くにものぼる。取り上げる基準や対象年代は異なるが，当麻論文の場合，地理学者による宗教地理学文献はわずか18，松井論文の場合は54（外国雑誌の論文を除く）であり，きちんとまとめられたように見える松井論文でさえも，文献目録としては漏れ落ちているものが圧倒的に多いということになる。したがって，宗教地理学の文献目録を作成すること自体，充分意義があることと考える。なお本稿では，文献目録が後の議論のたたき台となることを想定して，宗教地理学の範囲を広くとらえ，通常は宗教地理学には含めない文献でも，宗教に関係する地理学的研究はすべて「宗教地理学」として扱うことにする(ただし，迷信・風水関係の文献は除外した)。

第二の目的は，できあがった文献目録を統計的に分析し，研究動向を把握することである。これは前稿でも，1977年以降の20年間に関して行なったが，本稿では戦後約50年間について検討する。数量的分析の利点をいかして，松井論文であまり触れられていなかった研究動向の時期的変化にも着目することにしたい。

Ⅱ．宗教地理学文献目録の作成

宗教地理学文献目録作成の資料として，人文地理学会が戦後５年おきに編集してきた『地理学文献目録』第１集～第10集[4]を利用する。ここから，宗教関係の地理学文献を逐一抜き出し，宗教地理学文献目録を作成する。目録の常として本書にも当然遺漏はあるが，戦後の地理学文献を広範囲に網羅した目録としてこれにまさるものはない。『地理学文献目録』から落ちている文献を拾うことも大切であるが，できあがった目録が第Ⅲ章の分析対象になることを考慮して，恣意的になるおそれのある補充は原則として避けることにする。

文献リストアップの主な基準は，次のとおりである。

①宗教的内容であっても，非地理学者の文献は除外する。非地理学者（たとえば宗教学者）の宗教地理学的研究を視野に入れることも重要であるが，それらは『地理学文献目録』に収められていないものの方が多いと考えられる。『地理学文献目録』に収録された一部の文献だけを含めることは控えたい。地理学者か否かの区別は，出身分野，地理学の学会への入会の有無，他の著作などから判断したが，人物情報の得られない著者もあり，厳密な区別は困難である。

②非地理学者の文献でも，地理学の雑誌（『地理』・『地域』など）・単行本に掲載されたものは採録する。これは，サーキュレーションの面で地理学界との接点があると考えるからである。ただし，第Ⅲ章での分析対象からははずす。

③地理学者の書いた宗教地理学的内容の文献であっても（個人著の単行本に宗教関係の章が含まれている場合を含む），論文や本のタイトルが宗教的でない場合は除外する。内容で判断

しようとすると，すべての文献に目を通さねばならないが，それは不可能であり，また採録の基準が非常に曖昧になるからである。

④『地理学文献目録』第2集～第6集では書評，第4集では学会での発表要旨も採録されているが，第7集以降の採録基準に合わせて，これらの書評・発表要旨は除外する。

以上のような基準のもとに採録できた宗教地理学文献数は全部で390である。著者が地理学者か否かで区分すると，地理学者のみによるものが361，非地理学者のみによるものが20，地理学者と非地理学者の共著になるものが9である。地理学者と非地理学者の共著を，その比率によって按分すると，地理学者によるものは364.3となる。できあがった目録は，本稿の最後に別表として付した。

繰り返しになるが『地理学文献目録』には文献の遺漏があり，したがって，それに基づくこの宗教地理学文献目録も完全なものではない。たとえば，松井論文では，日本人地理学者による宗教関係文献（地理学の単行本に書かれた非地理学者の文献1つを含む）が全部で55挙げられているが，そのうち10が『地理学文献目録』にない。2つは戦前の文献，1つは外国で刊行された雑誌の論文であるので，当初から『地理学文献目録』の採録対象外であるが，それを除いても，『地理学文献目録』に入っていてもおかしくない文献が1割以上の7つも落ちていることは，その漏れの多さを推測させる[5]。

そこで，松井論文に引用されながら『地理学文献目録』に収録されていない10の宗教地理学文献も，その重要性に鑑みて本稿の文献目録に含めた。ただし，第Ⅲ章の分析対象とはしないこととする。なお，松井論文・『地理学文献目録』両方にありながら，上記③の基準で本稿の文献目録に入れなかったものが1つある[6]。

Ⅲ．宗教地理学文献目録の分析

表1　宗教地理学文献数の推移

年代	地理学者	非地理学者	合計
1945～51	3	1	4
1952～56	10	1	11
1957～61	32	3	35
1962～66	15	1	16
1967～71	39.8	1.2	41
1972～76	32.5	2.5	35
1977～81	45	5	50
1982～86	54.5	6.5	61
1987～91	65.5	3.5	69
1992～96	67	1	68
合計	364.3	25.7	390

1．文献数の推移と著者別の順位

まず表1は，『地理学文献目録』の単位である5年ごとに宗教地理学文献数の推移を表したものである。多少の増減はあるが，年を追って増加の傾向にあることがうかがえる。

表2　著者別文献数

著者名	文献数	著者名	文献数
大越　勝秋	21	海野　一隆	5.5
長野　　覺	15	藤本　利治	5
田中　智彦	15	森谷ひろみ	5
関口　靖之	15	稲田　道彦	5
内田　秀雄	14	金井　　年	5
小田　匡保	14	松井　圭介	5
中川　　正	12	当麻　成志	4
岩鼻　通明	10	鈴木　秀夫	4
千葉　徳爾	8.5	八木　康幸	4
岩田　慶治	8		

注1：文献数が4以上の著者のみ。
注2：文献数が同一の場合は，生年の早い順に並べた。

次に表2は，著者別に文献数を集計した結果のうち，文献数が4以上の著者を文献の多い順に並べたものである。最も文献数が多いのは，宮座関係の論著で知られる大越の21で，以下，長野，田中（智），関口，内田，小田，中川，岩鼻らが続く。ただし，これはあくまで『地理学文献目録』に掲載されている文献の数に基づくもので，実際にはそれに未掲載の文献が少なくないことはあらためて注記しておきたい。

2．著者からみた時期別の特徴

今度は，戦後の約50年間を10年ごと（『地理学文献目録』2冊ごと）に第1期～第5期に分けて，それぞれの時期の特徴を著者の面から検討してみたい。特徴を分かりやすくするために，文献数が3つ以上ある著者のみを取り上げて表3を作成し，時期別の動向を見てみる。

第1期（1945～1956年）は文献総数自体が少なく，特徴らしいものは指摘できない。第2期（1957～1966年）になると，大越と内田の文献が頻出する。大越は主に宮座の研究であり，内田は宗教分布と仏壇の研究である。その他に，第1期から続く海野の仏教思想や仏教系世界図の研究も注目される。当麻の展望論文が書かれたのは第2期の1961年で，まだ研究の蓄積の少ない時期であった。

第3期（1967～1976年）も相変わらず大越の宮座研究と内田の仏壇研究が多く見られる。大越の研究は1974年に『宮座』として，内田の研究は1971年に『日本の宗教的風土と国土観』としてまとめられる。その他に，藤本の門前町研究がスタートし，1970年には概説書的な『門前町』が上梓される。また，気候学者の鈴木（秀）が宗教と風土の関わりに関心を持ち始めるのもこの時期であり，1976年には『超越者と風土』が刊行される。それ以外では，森谷の式内社の研究がこの時期に多く登場するのが目につく。彼女は1975年に夭折しており，論文は『式内社の歴史地理学的研究』[7] としてまとめられている（本稿の文献目録には含まれていない）。以上の他にも，岩田の『カミの誕生』，帷子の『世界の文化地域と宗教』，仲松の『神と村』など，地理学者の宗教関係の単行本が多く出版された時期である。

第4期（1977～1986年）に入ると，大越・内田以外に，長野・岩鼻の文献の多さが際立つ。

表3　著者別・時期別文献数

著者名	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	合計
山口弥一郎	2		1			3
海野　一隆	1.5	3		1		5.5
大越　勝秋	1	7	8	5		21
内田　秀雄	1	5	4	3	1	14
水津　一朗	1	2				3
当麻　成志		3		1		4
杉原　和之		3				3
千葉　徳爾		2	3	2.5	1	8.5
浅香　幸雄		2	1			3
岩田　慶治		1	3	1	3	8
仲松　弥秀		1	2			3
長野　覺		1		7	7	15
森谷ひろみ			5			5
藤本　利治			4	1		5
鈴木　秀夫			4			4
小川　徹			3			3
有賀　密夫			3			3
田中　博			2	1		3
林　正巳			1	2		3
八木　康幸			1	1	2	4
岩鼻　通明				7	3	10
金井　年				4	1	5
田中　智彦				3	12	15
村上節太郎				3		3
関口　靖之				2	13	15
小田　匡保				2	12	14
稲田　道彦				2	3	5
長沢　利明				2	1	3
水田　義一				2	1	3
中川　正				1	11	12
松井　圭介					5	5
大城　直樹					3	3
三木　一彦					3	3
村山　磐					3	3

注）文献数が合計で3つ以上ある著者のみに限った。

長野は英彦山，岩鼻は出羽三山や立山を中心に，山岳宗教に関する論文を多数発表している。その他，金井の寺内町研究，田中（智）の巡礼研究が目につく。

第5期（1987～1996年）は，長野・岩鼻の研究がそれぞれ『英彦山修験道の歴史地理学的研究』（1987年），『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』（1992年）として集成される。長野の研究

はその後，山岳信仰と自然保護との関係に展開を見せている。また，第4期から登場していた田中（智）・関口・小田・中川らが，数多くの論文を発表している。関口は当初，古代の境界祭祀や式内社の研究を行なっていたが，1990年代に入ると，神社合祀に関する多数の報告を書いている。小田は，大峰の研究を中心にして，巡礼にも関心を示している。中川は，ルイジアナの墓地研究を進め，その成果は1997年に『ルイジアナの墓地』[8] としてまとめられている（本稿の文献目録の対象外）。以上の他にも松井が，信仰圏を中心とした多くの論文を発表し始めている。松井の展望論文が出たのは1993年であり，さまざまな宗教地理学研究が出現している時期であったが，その後も多くの研究が生まれてきている。

なお，文献総数では上位になりながら，上の時期別説明に取り上げなかった著者に千葉がいる。千葉の特徴は，第2期から第5期までコンスタントに文献が出ていることであり，地理学とともに民俗学の分野でも活躍した千葉は，民間信仰にも常に関心を持っていたことがうかがえる[9]。

3．著者の生年別の検討

次に，著者の生年別に検討を行なう。著者の生年は，日本地理学会・人文地理学会・歴史地理学会の新旧会員名簿，国立情報学研究所総合目録データベースのウェブ検索サービス，東京都立図書館のウェブ蔵書検索などによって調査した。結果は生年順に表4に示した。データの得られない著者も少なくないが，非地理学者を除く全著者157名のうち，生年が判明したものは133名（約85%）である。

生まれた年代別に著者の数を集計すると，表5のようになる。1950年代生まれの宗教地理学者が最も多く，次いで1920年代，1910年代となる。1960年代生まれ以降は，これからも増える可能性があるが，明らかに目につくのは1930年代・1940年代生まれの研究者の少なさである。

これを，それぞれの世代が書いた文献数で集計してみると（表5），1930年代・1940年代生まれの著者による研究の少なさがより顕著になる。逆に，1950年代生まれによる文献は全体の4分の1以上にものぼっており，最も研究者の層が厚く文献を量産しているのは1950年代生まれであると言える。具体的には，稲田・岩鼻・田中（智）・金井・中川・関口（以上，生年順）らの名前を挙げることができる。

1950年代生まれによる文献の多さは，第4期以降に宗教地理学文献数が増加する大きな要因になっている。第4期の文献数に占める著者が1950年代生まれのものの割合は約33%，第5期に至っては約48%にものぼっている（図1）。第5期は，1960年代生まれも約25%の文献を発表しており，これら2つの若い世代が第5期の宗教地理学研究の中心になっていると言える。

ところで，1930年代・1940年代生まれの著者の少なさについて，前稿では，宗教地理学的文献を書いたかもしれない地理学出身の研究者が，文化人類学に専門を移してしまったからではないかと述べた。しかし，『地理学文献目録』にはそういった人々の文献も収録されており，

表4　生年順著者リスト

生年	著　　者			生年	著　　者		
1885	田中秀作			1936	佐々木博		
1897	松尾俊郎			1937			
1898	帷子二郎			1938	橋本征治	森谷ひろみ	
1899				1939			
1900				1940	池田潤治		
1901				1941	永野征男		
1902	山口弥一郎			1942	千田　稔		
1903				1943	田中　博	堀　信行	
1904	石崎直義	香川幹一	宮川善造	1944	松浦一行		
1905	長井政太郎			1945	田口雄作	水田義一	山野正彦
1906	伊藤郷平	内田秀雄		1946	松本博之	安田喜憲	
1907	室賀信夫	渡辺茂蔵		1947	畑聡一郎		
1908	鮎沢信太郎	仲松弥秀		1948	碓井照子		
1909	位野木寿一	村上節太郎	安田初雄	1949	木庭元晴	諏訪哲郎	
1910	浅香幸雄	渡辺久雄		1950	杉浦芳夫	八木康幸	山田邦寿
1911	大越勝秋	三浦鉄郎		1951	稲田道彦	井村道弘	武内和彦
1912	神尾明正	藪内芳彦		1952	中俣　均	山本賢司	
1913				1953	石澤　孝	岩鼻通明	田中智彦
1914	小川　徹	林　正巳	藤岡謙二郎		村山祐司		
	三上正利			1954	石飛一吉	岩本広美	金井　年
1915					神　英雄	長沢利明	平井松午
1916	池田雅美	菊地利夫	千葉徳爾		森栗茂一		
1917	阿部正道			1955	小野寺淳	竹村一男	永幡　豊
1918					松尾容孝	吉成直樹	
1919	小池洋一	西田和夫	藤本利治	1956	青山宏夫		
1920	大島襄二	太田晃舜		1957	中川　正	額田雅裕	浜田弘明
1921	海野一隆	村山　磐			藤田裕嗣		
1922	岩由慶治	高木秀樹		1958	関口靖之		
1923	木村東一郎	水津一朗	野崎清孝	1959	佐々木高弘	矢澤和宏	
1924	五十嵐勇作	樋口節夫		1960	小田匡保	山口昭博	山近博義
1925	小沢利雄	中野栄治		1961	黒田晃弘		
1926				1962	島津俊之	椿真智子	
1927	市川健夫	山田安彦		1963	大城直樹	松井圭介	
1928	長野　覺	西田彦一	山本正三	1964	川田　力	木本雅康	
1929	佐々木高明	鶴藤鹿忠	藤曲萬寿男	1965			
1930				1966			
1931	杉本尚次	徳久球雄	南雲栄治	1967			
1932	杉原和之	鈴木秀夫		1968	鬼塚久美子	佐野静代	
1933	斎藤実則			1969	天野太郎	金子直樹	
1934	米田藤博	斎藤　毅	高橋　正	1970	今里悟之	大平晃久	舩杉力修
1935	北川建次			1971	三木一彦		

注）生年が同じ場合は，五十音順に並べた。

表5　生年別著者数・文献数

生年	著者数	比率(%)	文献数	比率(%)
～1899	3	1.9	4	1.1
1900～	14	8.9	35.5	9.7
1910～	17	10.8	59.5	16.3
1920～	21	13.4	54.4	14.9
1930～	13	8.3	23.9	6.6
1940～	15	9.6	19.3	5.3
1950～	32	20.4	98.1	26.9
1960～	14	8.9	36	9.9
1970～	4	2.5	6	1.6
不明	24	15.3	27.5	7.6
合計	157	100.0	364.2	100.0

注）共著の場合の端数があるため，文献数の合計が表1と異なる。

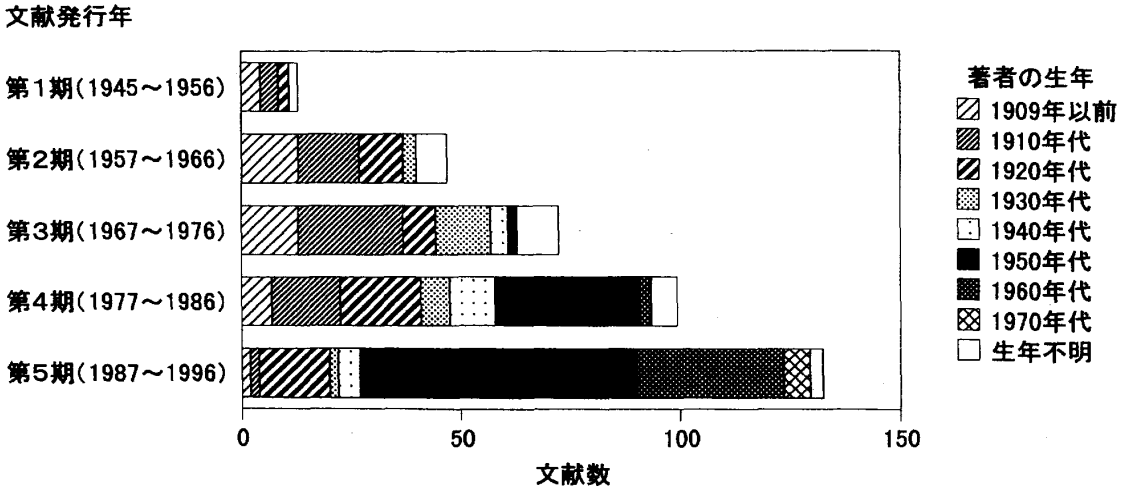

図1　著者生年別文献数の推移

それらは，生業活動など宗教以外のテーマに関わるものである。文化人類学に行って宗教関係の論文を書いたというわけではなさそうである。となると，1930年代・1940年代生まれが大学で地理学を学び始めた当時（つまり1950～1960年代），宗教が地理学の研究テーマになりにくい雰囲気のようなものがあったのかもしれないが，これは今後の検討課題である。皮肉なことに，1961年の当麻の展望論文は，まさにその時代に発表されたものであった。

著者の生年データを利用して，文献発表時の著者の年齢別に文献数を集計したのが表6である。計算を簡単にするために，各10年の生年期間の中央に仮の生年を設定して生年をそれに統一し，その生年の著者が何歳の時に宗教地理学の文献をいくつ発表したかという形で集計した。この結果から分かることの1つは，1900年代～1920年代生まれの宗教地理学者が，50～60歳代

表6　著者生年別・年齢別文献数

生年期間	(仮生年)	文献発表時の年齢								合計
		12～21歳	22～31歳	32～41歳	42～51歳	52～61歳	62～71歳	72～81歳	82～91歳	
～1899	(1895)	*	*	*	*	0	3	1	0	4
1900～	(1905)	*	*	*	4.5	10	12	7	2	35.5
1910～	(1915)	*	*	4	14	24	15.5	2	*	59.5
1920～	(1925)	*	2.5	10	7.4	18.5	16	*	*	54.4
1930～	(1935)	0	3	12.4	6.5	2	*	*	*	23.9
1940～	(1945)	0	4	10.3	5	*	*	*	*	19.3
1950～	(1955)	2	33.1	63	*	*	*	*	*	98.1
1960～	(1965)	2.5	33.5	*	*	*	*	*	*	36
1970～	(1975)	6	*	*	*	*	*	*	*	6
合計		10.5	76.1	99.7	37.4	54.5	46.5	10	2	336.7

注1：仮生年は生年期間の中央に設定した。
注2：たとえば，仮生年1895年生まれが52～61歳で発表した文献数とは，1899年以前生まれが第1期（1945～1956）に発表した文献数を示す。
注3：＊は『地理学文献目録』データがないものである。

に最も活動していることである。ただし，1900年代生まれは内田，1910年代は大越，1920年代は長野の執筆数に影響されている部分が大きいのだが，これら健筆家の分を除いてもピークは変わらない。

内田・大越・長野の3人について詳述しておくと，内田は1906年の生まれであるが，戦前には宗教地理学的研究はなく，宗教に関連する最初の論文は内田（1956）で，50歳の時である[10]。大越は1911年の生まれだが，戦前にはまったく著作がなく，宮座に関する初めての文献（本稿の文献目録には含まれず）は1951年，40歳の時に見える[11]。長野は1928年の生まれで，既に1955年に英彦山に関する論文[12]を書いているものの，本格的に宗教地理学研究に取りかかったのは，1978年，50歳の時に駒澤大学に着任して以降のことである。

これら年長の世代に対して，1950年代・1960年代生まれは，20歳代で早くも大量の文献を発表している。この量の多さは，直前の1930年代・1940年代生まれにおける20歳代の文献の少なさと比べて，きわめて対照的である。これは，学部生・大学院生時代から宗教地理学を専門とする研究者が出てきたことを示している。宗教地理学は，もはや中高年になって始める（第二の）研究テーマではなくなってきているのである。

4．研究テーマ別の検討

次に，展望論文でよく取り上げられる研究テーマ別の検討に移りたい。分析対象は地理学者が執筆している文献370とし（非地理学者との共著を含む），非地理学者のみによる文献は対象

外とする。

最初に，後述のいわゆる研究テーマとは異なるが，文献が扱っている宗教の種類別に検討する。宗教は，神道，仏教，修験道・山岳信仰，民間信仰・アニミズム（外国の事例を含む），キリスト教，新宗教，その他・宗教一般の６つのタイプに分類した。日本では神仏習合の歴史が長く，それが民間信仰化することもあり，また神道・仏教などさまざまな要素を併せ持った修験道も発達したため，宗教の種類を峻別するのは困難なケースも多いが，おおまかな傾向がつかめればよいと考える。宮座関係は神道に，国内の墓制関係は民間信仰に含めた。結果は図２のとおりである。神道・仏教関係の文献が多いのは当然として，目立つのは修験道の多さである。信者数や宗教施設数との比率で考えれば，神道・仏教に比べて山岳宗教は地理学的によく注目されてきたと言える。これは，霊山登拝者のための宗教集落が成立するとともに，霊山自体が研究の対象になるためであろう。また，民間信仰の割合も大きいが，墓制研究を含めて，宗教地理学者に民俗学的関心の強い人が少なくないことを示している[13]（たとえば千葉・八木）。これらと対照的に，新宗教に関する文献は非常に少ない。天理を扱ったものが4.5，丸山教関係が２つ，モルモン教が１つあるだけである。現代における新宗教の重要性に鑑みれば，新宗教はもっと研究されてよいはずだが，天理のような宗教都市・宗教集落が少ないこと，際立った巡礼・参詣現象があまりないことなど，地理学的な視点でのとらえにくさも一因していると思われる。なお時期別には，それほど顕著な特徴は見られない。

次に，研究テーマとしてよく登場する宗教都市・宗教集落について検討する。筆者の集計では，全370の文献のうち55が宗教都市・宗教集落に関するものである。この中には，さらに，門前町（18文献，天理を除く）・寺内町（９文献）・山岳宗教集落（16文献）などのサブグループがある。門前町研究は，『門前町』を表した藤本の他，石澤・佐々木・杉原らによって，寺内町研究は，金井・水田らによって行なわれている。また，山岳宗教集落については，浅香・

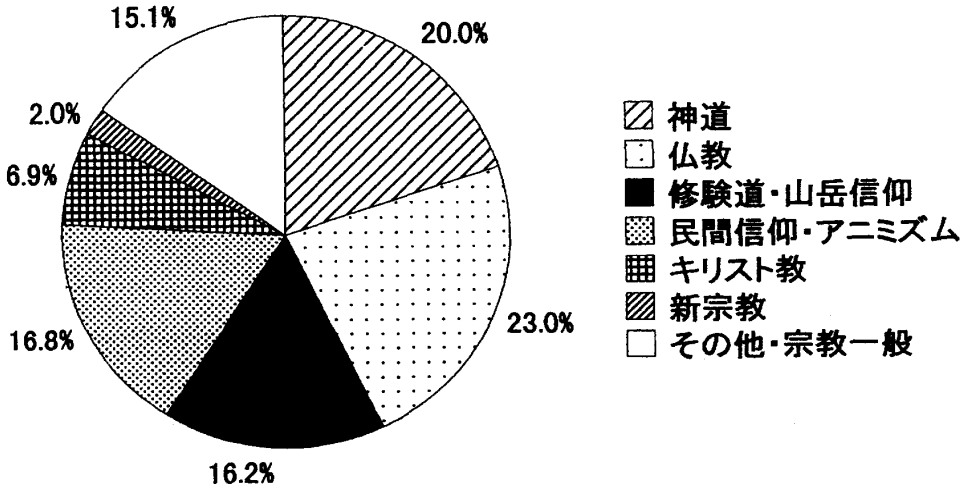

図２　宗教別文献数の割合

有賀・岩鼻・長野らの研究がある。表7によって，これらの時期的推移について見てみると，第4期までは文献数が増加しているが，第5期に入って減少傾向が認められる。宗教都市・宗教集落は地理学的に着目しやすいテーマではあるが，現在その研究はあまり活発とは言えない状況にある。

表7　研究テーマ別・時期別文献数

研究テーマ	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	合計
宗教都市・宗教集落	2	11	14	18	10	55
巡礼・参詣	0	3	1	11	20	35
墓制	0	0	3	3	22	28
宗教分布・信仰圏	0	2	4	2	6	14
村落の宗教組織	1	10	9	9	3	32
絵図	1	3	0	4	12	20
山岳聖域	0	0	1	9	9	19
古代	1	0	5	7	11	24

注）同一の文献が上記の複数のテーマにまたがることがある。他方，上記のいずれのテーマにも属さない文献も多い。

研究テーマの2番目として，巡礼・参詣を取り上げる。関連文献は35を数える。著者の代表は，14の論文を執筆している田中（智）であり，他に岩鼻・小田・小野寺・田中（博）・村上（節）らの研究が挙げられる。時期的には第4期と第5期に急増している。これは，田中（智）の文献数に影響されているためであるが，彼の分を除いても，第4期以降の伸びは目覚ましく，巡礼研究はこの20年間で活況を呈してきた研究テーマであると言える。

第三に，墓制研究について考察する。文献数は全部で28である。この量の多さは，9つの論文を書いている中川に負うところが大きい。彼以外には，稲田・大城・長沢・森栗・八木らの研究がある。時期別に見ると，中川の文献がすべて該当する第5期の急増ぶりが著しいが，彼の分を除いても，第5期の増え方は顕著である。墓制とくに墓地は，最近急速に注目されてきたテーマと言える。

第四に，宗教分布・信仰圏について検討する。文献数は14であり，内田・松井らの研究がその代表である。宗教分布は，戦前の『地理学評論』にも掲載された古くからの研究テーマであるが，岩鼻（1983b）以降，信仰圏の問題として再び活発に議論されている。1997年以降も松井・金子らによって信仰圏に関する重要な論文が発表されており，今後の展開が期待できるテーマであろう。

第五に，村落構造や村落間結合との関わりで宗教組織を扱う研究が見られる。大越・平井・八木の取り上げた宮座を初めとして，水津の教区，野崎の墓郷・かくれキリシタン組織，橋本の神社祭祀圏などが例として挙げられる。文献数は32で，20を数える大越の割合が大きい。もっとも，宗教組織に言及しながらタイトルには宗教的名称を含まず，一般には村落地理学の文献

と見なされるものは多いであろう。時期的には，大越の著作が大量に発表された第2～4期にピークがあるが，彼の文献を除いて考えると，少数ながら常に地理学者の関心を引いてきたテーマと言える。

以上の研究テーマとは若干次元が異なるが，宗教的な絵図や参詣曼荼羅を研究資料・研究対象とするものがある。文献数は20である。この絵図類は2つに分けることができる。1つは寺社境内図・参詣曼荼羅・巡礼絵図のように聖域を描写したもの（16文献）で，岩鼻の立山マンダラ研究がその代表である。もう1つは，室賀・海野が研究を行なった仏教系世界図（4文献）である。時期的には，後者の研究が第2期でストップするのに対し，前者の研究は第4期から始まり，第5期には急増している。絵図の研究は地図史に属する面が強いが，宗教地理学的にも注意を払っておくべきであろう。

上記の視覚的資料のうち，霊山の参詣曼荼羅の研究は，山岳聖域の研究であるとも理解することができる。これは，小田の大峰の研究，長野の入峰道の研究と接合するものである。これら山岳聖域研究の文献を数えると，19にのぼる。石飛（1976）にも聖域への関心の嚆矢が見られるが，1980年代以降注目されてきた新しい研究領域であると言える。

いわゆる研究テーマとは異なるが，対象とする時代別に見ると，近世・近代を扱ったものが多い中で，古代に関する研究が特色ある一群のものとしてとらえられる。文献数は24である。森谷の式内社研究，鬼塚・関口の祭祀研究，木本・山田（安）の方位信仰研究などがその例である。これも近年，研究が増加している分野である。

以上の他にも研究テーマはいろいろ見られるが，特定個人によるものや文献数の少ないものは省略したい。松井論文が4つのテーマの1つとして掲げる宗教と風土・自然環境との関係は，松井も認めるように，研究の蓄積が多いとは言えず，ここでは取り上げなかった。「都市・村落景観と宗教」との関わりという2つめのテーマの中で出される移住集落と宗教との関係や，「宗教の分布・伝播と空間構造」という4つめのテーマの中で詳しく紹介される宗教社会学的な宗教の伝播・定着過程の研究も，文献数が少なく，割愛した。

最後に念のため，上述の研究テーマについて付言しておくと，これらのテーマは互いに排他的なものではなく，同一の文献が複数のテーマにまたがることはありうる。たとえば，巡礼絵図の研究は，巡礼研究にも絵図研究にも含まれる。他方，上記のいずれのテーマにも属さない文献も多い。松井は，日本の宗教地理学研究が4つに「分類することができる」[14] と述べるが，研究テーマのきちんとした分類は，なかなか困難であり，主な研究動向が把握できさえすれば，無理に分類しきる必要はないと考えている。

Ⅳ．おわりに

以上本稿では，『地理学文献目録』をもとに宗教地理学文献目録を作成し，それを数量的に

分析することによって，戦後日本の宗教地理学の研究動向を検討してきた。要点をまとめれば，次のようになろう。

・宗教地理学の文献数は年々増加している。

・第2～3期（1957～1976年）は大越と内田の文献が多く，第4期（1977～1986年）にはそれに加えて長野・岩鼻が登場し，第5期（1987～1996年）には田中（智）・関口・小田・中川らも数多くの論文を発表している。

・著者の生年別では1950年代生まれの宗教地理学者が最も多く，1930年代・1940年代生まれの研究者が少ない。これは前稿でも指摘ずみである。

・宗教別では，山岳宗教研究の相対的多さと新宗教研究の少なさが目立つ。

・主な研究テーマには，①宗教都市・宗教集落，②巡礼・参詣，③墓制，④宗教分布・信仰圏，⑤村落の宗教組織，⑥絵図，⑦山岳聖域がある。近年研究が増加しているのは②，③，④，⑥，⑦であり，①は減少傾向にある。

今後の課題の1つとしては，宗教地理学文献目録の補訂がある。本稿では親データを基本的に『地理学文献目録』に依拠しており，現物確認をしていない文献が多いため，書誌事項に誤りがないとは言えない。また当然のことながら，『地理学文献目録』から漏れ落ちている文献も少なくなく，戦前のものを含めてそれらを補足していく必要がある。タイトルが宗教的でないという理由で除外された文献の補足も検討しなければならないであろう。

第二に，学史的には，文献の重要性や影響関係（地理学以外の学問分野を含む）を考察することも必要である。そのためには，ある文献が何を引用しているのか，誰にどれほど引用されているのかという引用分析も試みなければならない。その場合，宗教地理学全体というのはあまりにも範囲が広く，研究テーマごとに検討することになろう。こうした研究史の整理のうえに，今後の新たな研究の視野も開かれていくと考える。

注

1）Oda, M. Geography of Religion in Japan since 1977, 地域学研究12, 1999, 27～32頁。

2）当麻成志「日本宗教地理学の提唱」，人文地理13-4, 1961, 347～360頁。

3）松井圭介「日本における宗教地理学の展開」，人文地理45-5, 1993, 515～533頁。

4）人文地理学会・人文地理学会文献目録編集委員会編『地理学文献目録』第1集～第10集，柳原書店・大明堂・古今書院，1953～1998。

5）文献漏れの多さの一因は，『地理学文献目録』第9集で雑誌論文の採録方法を大幅に変更し，「雑誌記事索引」の利用をやめて，「地理学関連主要誌」以外の雑誌論文は人文地理学会会員の自己申告制度をとったことである。第10集でも類似の方針がとられており，自己申告を行なわなかった著者は，『地理学文献目録』に文献があまり収められていない結果になっている。また，「地理学関連主要誌」に選定されながらも『地域学研究』掲載の英語論文の多くは，なぜか第9集から脱落しているという問題がある。古い例では，第2集の採録雑誌一覧には，当時刊行されていた『法政地理』

の名前が見あたらない。

6）小野寺淳「北陸農民の北関東移住」，歴史地理学紀要21，1979。

7）森谷ひろみ『式内社の歴史地理学的研究―安房国・伊豆国三宅島の場合』，森谷恵，1977。

8）中川正『ルイジアナの墓地―死の景観地理学』，古今書院，1997。

9）戦時中の『地理学評論』にも宮座に関する論文を発表しており，第2期からということではなく，研究生活を始めてから一貫して信仰にも関心を持っていたと言ってよいであろう。千葉徳爾「近江に於ける宮座の考察」，地理学評論20-4，1944，209～217頁。

10）内田の著作全般については，内田秀雄『日本の宗教的風土と国土観』，大明堂，1971，312～315頁を参照。

11）大越の著作全般については，「大越勝秋教授略歴・著作目録」，阪南論集（人文・自然科学編）17-2•3（大越勝秋教授退任記念号），1982，125～129頁を参照。

12）長野覺「門前町の歴史地理的研究―福岡県英彦山について」，法政地理3，1955，4～11頁。この論文は『地理学文献目録』に採録されておらず，本稿の文献目録にも含まれていない。

13）地理学と民俗学との関係についてはいくつかの文献があるが，最近のものとして次の小文がある。内田忠賢「地理と民俗」，地理46-4，2001，42～46頁。

14）前掲注3）520頁。

Komazawa Geography, No.38 pp.21-51, 2002

Geography of Religion in Postwar Japan: An Analysis of the Bibliography

Masayasu ODA*

This paper makes a bibliography of geography of religion in Japan on the basis of *Bibliography of Geography* edited by the Human Geographical Society of Japan and attempts to analyze it statistically, so that it examines the research trend in the geography of religion in postwar Japan.

Bibliography of Geography appeared ten times every five years after the Second World War. It covers extensively most of the geographical literature published in Japan. The number of books and articles related to the geography of religion collected from *Bibliography* amounts to 390, of which more than 360 items are written by geographers.

Main points obtained through the analysis are as follows:

1. The volume of the items has increased steadily after the war.

2. In the second and the third stage (1957–1976) Ogoshi and Uchida wrote many papers. In the fourth stage (1977–1986) Nagano and Iwahana were productive, and in the fifth stage (1987–1996) other geographers such as T. Tanaka, Sekiguchi, Oda and Nakagawa were also active.

3. It is geographers born in the 1950s who published more works than any other. On the contrary there are somehow few scholars in the immediately earlier generations born in the 1930s and 1940s.

4. Mountain religion has often been studied by geographers in spite of its small number of believers and temples, whereas so-called new religions have received little attention.

5. Popular research subjects include religious city and settlement, pilgrimage, cemetery, distribution of religion, rural religious organization, pictorial map, and mountain sacred area. Many of them attract more interest recently, but the literature related to the religious city and settlement has decreased in number.

*Department of Geography, Komazawa University, Tokyo

別表　宗教地理学文献目録

著者	発行年	タイトル	掲載誌・巻号／所収書名（発行所）／発行所	頁	備考
青山　宏夫	1991	居多神社四至絵図とその周辺の歴史地理学的諸問題	新潟史学26	1-25頁	
(浅香勝輔)	1981	都市施設としての京都の火葬場	地域 9		
(浅香勝輔)	1990	墓地から出発した火葬場とその系譜	地理35-8	29-36頁	
(浅香勝輔)	1994	環境変化と都市型火葬場	歴史地理学36-1	42-63頁	
浅香　幸雄	1959	信仰登山集落の形成(1)—木曽御嶽の場合	東京教育大学地理学研究報告 3		当・松
浅香　幸雄	1963	富士北口の上吉田・河口の御師町の形態とその構造—信仰登山集落の形成(2)	東京教育大学地理学研究報告 7		松
浅香　幸雄	1967	大山信仰登山集落形成の基盤	東京教育大学地理学研究報告11		松
阿部　正道	1961	鎌倉地蔵尊二十四ヶ所霊場巡拝に就て	鎌倉（鎌倉文化研究会）6		
天野　太郎	1996	大坂石山本願寺寺内町プランの復原に関する研究—位置比定と内部構成をめぐって	人文地理48-2	22-41頁	
鮎沢信太郎	1950	幕末仏教界をおびやかした新地理学	新地理4-8		
有賀　密夫	1971	大山門前町の研究—門前町の形成と御師の活動と檀家圏	地域研究14		松
有賀　密夫	1972	出羽三山を中心とする山麓信仰集落について	地域研究13-1		松
有賀　密夫	1974	富士山を中心とする山麓信仰集落	地域研究15-2		松
五十嵐勇作ほか５名	1973	『東北の民間信仰』	明玄書房		
(井門富二夫)	1970	宗教地理	『文化地理学』（朝倉書店）		(松)
池田　潤治	1996	弘法清水伝説に関する地理学的アプローチ	和歌山地理16	27-39頁	
池田　雅美	1970	門前集落の構造と生活—岩手県黒石町山内部落の場合	地理15-10		
池田　義則	1973	鳥海山の信仰と嶺境争論について	山形地理 2		
(石川晃弘)	1980	東欧における宗教と社会主義	地理25-10		
石崎　直義	1985	越中人の二十四輩順拝の旅	歴史地理学紀要27		
石澤　　孝	1992	都市の成立起源と成長過程—門前町長野と城下町松代の場合	信州大学教育学部紀要77	83-109頁	
石澤　　孝	1993	門前町長野における善光寺の役割とその変化	年報長野県地理11	1-17頁	
石飛　一吉	1976	屋久島における山岳信仰圏の研究	鹿児島地理学会紀要22-2		
石原　与作	1957	立山参詣路の変遷	越中史壇10		
市川　健夫	1961	戸隠の信仰集落	地理6-10		
伊藤郷平・梅田幸房	1967	宗教都市の分析法試論—天理市を事例として	『奈良文化論叢』（堀井先生停年退官記念会）		

(伊藤唯真)	1960	滋賀県浄土宗寺院の分布	人文地理12-5		
稲田　道彦	1984	我国の周辺地域の葬制・墓制文化の概観	香川大学一般教育研究26		
稲田　道彦	1985	小豆島の墓制の最近の変化	香川大学教育学部研究報告（第1部）64		
稲田　道彦	1989	香川県詫間町の両墓制墓地の変貌過程	理論地理学ノート6	59-66頁	
稲田　道彦	1990	日本人はどこに墓をつくってきたか	地理35-8	21-28頁	
稲田　道彦	1993	時間の文化地理試論一輪廻思想と刹那思想	香川大学教育学部研究報告（第1部）88	189-208頁	
位野木寿一	1959	金比羅灯籠の交通地理的意義	人文地理11-3		当
今里　悟之	1995	村落の宗教景観要素と社会構造一滋賀県朽木村麻生を事例として	人文地理47-5	42-64頁	
井村　道弘	1977	近畿中央部の山の神まつりについて一カギヒキを中心として	駒澤大学大学院地理学研究7		
岩田　慶治	1963	ホー・ピー（精霊の祠）について一東南アジアにおける仏教以前の信仰	『民族学ノート一岡正雄教授還暦記念論文集』（平凡社）		
岩田　慶治	1968	東南アジア諸民族のカミ観念	『人文地理学の諸問題』（大明堂）		
岩田　慶治	1970	『カミの誕生一原始宗教』	淡交社		
岩田　慶治	1972	カミの住み家一あるいはアニミズム再考	季刊人類学3-2		
岩田　慶治	1979	『カミの人類学一不思議の場所をめぐって』	講談社		
岩田　慶治	1995a	『岩田慶治著作集2　草木虫魚のたましい一カミの誕生するとき・こころ』	講談社		
岩田　慶治	1995b	『岩田慶治著作集4　アニミズムの地平一フィールドワークの経験』	講談社		
岩田　慶治	1995c	『岩田慶治著作集5　道元との対話一山河大地の言葉』	講談社		
岩鼻　通明	1981	観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌	人文地理33-5		松
岩鼻　通明	1983a	出羽三山をめぐる山岳宗教集落	地理学評論56-8		松
岩鼻　通明	1983b	出羽三山信仰圏の地理学的考察	史林66-5		松
岩鼻　通明	1983c	宗教景観の構造把握への一試論一立山の縁起，マンダラ，参詣絵図からのアプローチ	『空間・景観・イメージ』（地人書房）		松
岩鼻　通明	1985	参詣曼荼羅にみる立山修験の空間認識	歴史地理学紀要27		
岩鼻　通明	1986a	西国霊場の参詣曼荼羅にみる空間表現	『人文地理学の視圏』（大明堂）		松
岩鼻　通明	1986b	立山マンダラ作成年代考	山岳修験2		
岩鼻　通明	1987	道中記にみる出羽三山参詣の旅	歴史地理学139	1-14頁	松
岩鼻　通明	1989	立山マンダラにみる聖と俗のコスモロジー	『絵図のコスモロジー（下）』（地人書房）	223-238頁	
岩鼻　通明	1992a	『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』	名著出版		松
岩鼻　通明	1992b	近世の旅日記にみる善光寺・戸隠参詣	長野165		(松)

岩鼻　通明	1992c	戸隠信仰の地域的展開	山岳修験10		(松)
岩本　広美	1978	会津若松市における宗教用具生産の発展と構造	学芸地理32		
碓井　照子	1979	大正・昭和初期における都市の形成と土地所有について―生駒門前町の事例	歴史地理学会会報105		
内田　秀雄	1956	近江の集落景観の一特質について―近江仏教地理的研究	『田中秀作教授古稀記念地理学論文集』（柳原書店）		
内田　秀雄	1959a	曹洞宗の発展―仏教地理的研究	大阪学芸大学紀要（人文科学）8		
内田　秀雄	1959b	真宗の発展―仏教地理的研究	人文地理10-5•6		当
内田　秀雄	1960	九山八海岩―須弥山象徴の諸例	地理学報 9		
内田　秀雄	1965a	飯山仏壇について	『篠田統先生退官記念論文集』		
内田　秀雄	1965b	彦根仏壇について	大阪学芸大学紀要（人文科学）13		
内田　秀雄	1967	詰所の地理学的研究―本願寺と天理教の場合	『奈良文化論叢』（堀井先生停年退官記念会）		
内田　秀雄	1968a	北陸における仏壇工芸について―金沢を中心として	『人文地理学の諸問題』（大明堂）		
内田　秀雄	1968b	名古屋の仏壇工芸について	大阪教育大学紀要（Ⅱ）18		
内田　秀雄	1971	『日本の宗教的風土と国土観』	大明堂		松
内田　秀雄	1977	三河における仏壇工芸	奈良大学紀要 6		
内田　秀雄	1978a	京都仏教漆芸	地理学報17		
内田　秀雄	1978b	宗教と地場産業	地理23-12		
内田　秀雄	1995	越後・常陸の親鸞と近江金森の蓮如，その人国記的記述	地理学報30	1-28頁	
梅田　幸房	1967	→伊藤郷平・梅田幸房（1967）			
梅山　和代	1984	関東地方における神社信仰の地域性と重層性	お茶の水地理25		旧姓:小寺
海野　一隆	1955	→室賀信夫・海野一隆（1955）			
海野　一隆	1956	中国仏教における世界区分説―四主説の地理的展開	『田中秀作教授古稀記念地理学論文集』（柳原書店）		
海野　一隆	1957a	南瞻部洲万国掌菓之図の反響―江戸時代地図史の一齣	地理学報 7		
海野　一隆	1957b	→室賀信夫・海野一隆（1957）			
海野　一隆	1958	崑崙四水説の地理思想史的考察―仏典及び旧約聖書の四河説との関連において	史林41-5		
海野　一隆	1962	→室賀信夫・海野一隆（1962）			
海野　一隆	1981	李朝朝鮮における地図と道教	東方学報57		
（江上波夫・大林太良）	1953	日本の人種・民族・宗教	『日本地理新大系第 2 巻社会・経済』（河出書房）		
大越　勝秋	1952	『貝塚市の宮座について』			

大越　勝秋	1957	和泉地方の宮座と分布	社会と伝承 5	
大越　勝秋	1957～58	『和泉宮座史料集 1 ～ 3 』		
大越　勝秋	1960a	和泉の寺座の類型	日本民俗学会報11	
大越　勝秋	1960b	和泉の同族座	社会科研究 2	
大越　勝秋	1960c	和泉南部の庚申信仰―講及び堂塔分布	日本民俗学会報14	
大越　勝秋	1962	和泉の宮郷の分布と成立	人文地理14-6	
大越　勝秋	1963	和泉地方の宮郷の形式	立正地理学会研究報告 3	
大越　勝秋	1967～68	堺宮座史料集(1), (2)	堺研究 2，3	
大越　勝秋	1967a	和泉地方における宮座と血縁性	人文地理19-4	
大越　勝秋	1967b	和泉地方における宮郷と農業用水・共有山	歴史地理学紀要 9	
大越　勝秋	1970	和泉地方における宮座の諸問題―宮座名称と宮座分布	新地理17-4	
大越　勝秋	1971	泉大津市宮座史料集(1)	阪南論集 4	
大越　勝秋	1972～73	泉大津市宮座史料集(2)～(7)	阪南論集5,6,7,8,9-1,9-2	
大越　勝秋	1974a	和泉市宮座史料集(4)～(6)	阪南論集10-1,10-2,10-3	
大越　勝秋	1974b	『宮座―和泉地方における総合的研究』	大明堂	
大越　勝秋	1978	岸和田市における宮座(6)	阪南論集（人文・自然科学）14-1	
大越　勝秋	1980	大阪泉北郡忠岡町における宮座	阪南論集（人文・自然科学）15-1	
大越　勝秋	1981	大阪府高石市における宮座	阪南論集（人文・自然科学）16-1	
大越　勝秋	1982	和泉地方における中世宮座史料	阪南論集（人文・自然科学）17-4	
大越　勝秋	1983	宮座と婿養子	阪南論集（人文・自然科学）18-4	
大島　襄二	1982	南太平洋における宣教師の地理学的研究―トレス海峡に「光の来た日」	歴史地理学119	
大城　直樹	1992	村落景観の社会性―沖縄本島北部村落の祭祀施設の場合	歴史地理学159	2-20頁
大城　直樹	1994a	墓地と場所感覚	地理学評論67A-3	169-182頁
大城　直樹	1994b	八重山・石垣島の墓地風水絵図―「自分墓地フンシー見取図」について	人文地理46-5	74-92頁
太田　晃舜	1991	越後における「親鸞」周辺の空間的関連の考察―その風土的影響のアプローチ	地理誌叢33-1	22-31頁
（大津忠男）	1980	→千葉徳爾・大津忠男（1980）		
（大林太良）	1953	→江上波夫・大林太良（1953）		
大平　晃久	1996	香川県三野町における墓制―近世における村落の変容とのかかわりから	人文地理48-6	43-57頁
小川　　徹	1968	沖縄における若干の墓型とその時代	法政大学文学部紀要13	
小川　　徹	1972	百姓門中における清明祭受容の一事例	日本民俗学79	
小川　　徹	1973	沖縄年中祭祀の歴史地理的一考察	法政大学文学部紀要18	

小沢　利雄	1985	江戸市街地の拡大と寺院について	『地域の探求』（古今書院）		
小田　匡保	1984	小豆島における写し霊場の成立	人文地理36-4		松
小田　匡保	1986	大峰の「ナビキ」考	『人文地理学の視圏』（大明堂）		
小田　匡保	1987a	「山家集」に見る山岳聖域大峰の構造	史林70-3	129-154頁	
小田　匡保	1987b	山岳聖域研究から見た河東碧梧桐の大峰登山記	山岳修験 3	52-62頁	
小田　匡保	1987c	民俗誌の史料的検討―宮本常一『吉野西奥民俗採訪録』の修験の話を中心として	京都民俗 5	69-79頁	
小田　匡保	1988	大峰の霊地伝承史料とその系譜―秘所一覧と四十二宿一覧を中心に	山岳修験 4	83-95頁	松
小田　匡保	1989a	巡礼類型論の再検討	京都民俗 7	77-87頁	
小田　匡保	1989b	山岳聖域大峰における75霊地観の成立とその意義	人文地理41-6	24-40頁	松
小田　匡保	1991	Geographical Perspectives on the Study of Shugendo, A Japanese Mountain Religion	地域学研究（駒澤大学応用地理研究所） 4	19-27頁	（松）
小田　匡保	1993a	本山修験宗の1992年度大峰奥駈南部修行について	駒澤地理29	79-111頁	
小田　匡保	1993b	山岳宗教研究の地理学的諸問題―岩鼻通明著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』を評して	駒澤地理29	135-153頁	松
小田　匡保	1993c	一般型大峰75霊地名一覧の諸類型と流布―登山家と研究者の役割	地域学研究（駒澤大学応用地理研究所） 6	71-88頁	松
小田　匡保	1994	ギスベルト=リンシェーデの巡礼研究について	駒澤地理30	129-141頁	
小田　匡保	1995	聖ヴォルフガング没後千年祭にみるドイツ南部のカトリック巡礼	駒澤地理31	39-68頁	
小田　匡保	1996	日本の山岳宗教［独文］	駒澤大学文学部研究紀要54	33-54頁	
鬼塚久美子	1995	古代の宮都・国府における祭祀の場	人文地理47-1	1-20頁	現姓:山近
鬼塚久美子	1996	人面墨書土器からみた古代における祭祀の場	歴史地理学38-5	19-37頁	〃
小野寺　淳	1990	道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合	筑波大学人文地理学研究14	231-256頁	松
小野寺　淳	1995	東播磨における近世の伊勢参宮―明石市東二見を事例に	交通史研究35	84-95頁	
香川　幹一	1968	江ノ島門前町の変貌	地理13-8		
帷子　二郎	1962	アフリカの自然と民族・宗教	ビブリア22		
帷子　二郎	1970	『世界の文化地域と宗教』	大明堂		
金井　　年	1980a	宗教都市の景観と立地についての覚書	待兼山論叢14		
金井　　年	1980b	寺内町の形態の類型とその変容	人文地理33-3		
金井　　年	1980c	歴史地理学からみた寺内の性格―八尾の三つの寺内町を比較して	歴史地理学会会報108		
金井　　年	1984	吉崎における中世的景観と近世的景観	歴史地理学紀要26		

金井　年	1996	三河の寺内町プラン―その特徴と畿内型寺内町との比較	ヒストリア153	135-153頁	
金子　直樹	1995	日本における信仰圏研究の動向―山岳宗教を中心にして	人文論究（関西学院大学）45-3	104-117頁	
川田　力	1989	日本におけるプロテスタント・キリスト教会の立地過程―明治期・関東地方を中心として	地理科学44-4	1-16頁	
神尾　明正	1988	式内青渭神社の鎮座地について	歴史地理学141	25-32頁	
菊地　利夫	1973	「七里ヶ法華」の歴史地理学的研究	歴史地理学紀要15		
菊地　利夫	1979	会津盆地の修験山伏による定期市の市立とその歴史心理	歴史地理学会会報103		
（木倉豊信）	1958	立山史概説	『富山県の地理学的研究2』（富山地学会）		
北川　建次	1980	南インドの寺院町・メルコテの地域構造とその変容	『史学研究五十周年記念論叢』（福武書店）		
木谷　正夫	1956	訳：インドの言語と宗教	新地理5-2		
城戸　貴子	1991	→椿真智子・城戸貴子（1991）			
木村東一郎	1984	武蔵国西部山麓地方に分布する村内社	長野大学紀要5-4		
木本　雅康	1993	日置・壬生吉志と氷川神社―古代の方位信仰を手がかりとして	歴史地理学163	17-37頁	
木本　雅康	1995	鹿島神宮と筑波山の方位関係について―『常陸国風土記』を手がかりとして	日本民俗学202	100-110頁	
（工藤定雄）	1967	→長井政太郎・工藤定雄（1967）			
黒田　晃弘	1992	国神神社本白山参詣曼荼羅図にみる宗教景観像	人文地理44-6	66-84頁	松
桑原　公徳	1970	宗教都市としての天理市の性格―町村合併促進法施行後の都市のタイプとして	花園大学研究紀要 1		（松）
小池　洋一	1983	高野山宗教集落の創功と変遷	和歌山地理 3		
郡山　重遠	1976	薩摩半島南東部におけるモイドン（森殿）信仰圏の地理学的研究	鹿児島地理学会紀要22-2		松
（後藤光一郎）	1978	宗教現象と風土	地理23-12		
木庭元晴・濱上さおり	1994	大阪市域の墓地分布とその特色	ジオグラフィカ・センリガオカ 2	107-120頁	
米田　藤博	1992	大和新四国の開創とその変遷	地理学報28	95-110頁	
近藤　正気	1972	実態調査による富士登山客	『静岡県の自然と人文』（佐々木清治先生御退職記念事業会）		
斎藤　実則	1980	鉱山地域の宗教	『西村嘉助先生退官記念地理学論文集』（古今書院）		
斎藤　毅	1988	相模湾岸漁村の海亀信仰に関する研究ノート	『神奈川の自然と人文』（伊倉退蔵先生退官記念出版会）	69-73頁	
酒井喜八郎	1991	ペンシルバニア州南東部の都市化―アーミッシュの文化変容を中心に	地理学報告（愛知教育大学）72	42-47頁	
佐々木高明	1967	パーリア族の精霊（ゴサイン）と焼畑農耕儀礼―インド未開焼畑農耕民のカミとその供犠についての調査報告	立命館文学265		

佐々木高弘	1989	都市景観のなかの宗教—宗教地理学の一試論	日本学報 8	105-128頁	
佐々木　博	1982	Geographical analysis on the Tsukuba Monzenmachi	Ann. Report of the Instit. of Geosci., The Univ. of Tsukuba 8		
佐々木　博	1983	筑波山門前町の立地生態	筑波大学人文地理学研究 7		
佐野　静代	1993	近江国伊香郡における式内社と氏族	人文地理45-1	83-97頁	
(沢井浩三)	1958	寺内町の形成とその性格	『畿内歴史地理研究』（日本科学社）		
島津　俊之	1990	奈良東山中「新西国三十三所」と村落間結合	歴史地理学151	1-15頁	松
神　　英雄	1978	古代辺境村落に関する一考察—大崎平野における式内社と鹿島・香取神社苗裔社分布を中心として	龍谷史壇76		
水津　一朗	1948	トテミズムと地縁性	古文化 1		
水津　一朗	1959	大教区の形成とその地理学的意義について—ドイツにおける 3 ・ 4 の事例を中心として	人文研究10-2		当
水津　一朗	1962	チューリンゲンにおける集落とガウ・教区・封建領域について	史林47-6		
杉浦　芳夫	1978	地域体系との関連でみた江戸明和期の“御蔭参り”の空間的拡散	地理学評論51-8		松
杉原　和之	1958a	京都市宗教・観光商店街の地理学的研究—伏見稲荷大社鳥居前町の場合	桃山歴史地理 2		
杉原　和之	1958b	京都市及びその近郊に於ける宗教的縁日の研究—六道珍皇寺の場合	史想（京都学芸大学） 8		
杉原　和之	1964	京都市における宗教観光商店街の地理学的研究—銀閣寺門前における場合	京都学芸大学地理学研究報告10		
杉本　尚次	1973	大阪府の民間信仰	桃山学院大学社会学論集 7-1		
杉本尚次ほか 6 名	1974	『近畿の民間信仰』	明玄書房		
鈴木　秀夫	1971a	世界観と地理学	地理16-1		
鈴木　秀夫	1971b	World Views and Geography	Bulletin of the Department of Geography, University		
鈴木　秀夫	1974	地理学と神学に関するビュットナーの研究	地理学評論47-10		
鈴木　秀夫	1976	『超越者と風土』	大明堂		松
鈴木　道郎	1966	明治初期における相模大山御師の経済生活	地理学評論39-10		(松)
諏訪哲郎・中俣均・吉成直樹	1979	久高島のイザイホーをめぐって(1)•(2)	地理24-5,6		
関口　靖之	1986a	古代日本の境界祭祀と主要交通路	和歌山地理 6		
関口　靖之	1986b	古代畿内東限の疫神祭祀地と主要交通路	地理学報24		
関口　靖之	1987	畿内の式内社の地理的分布とその地域的特性	日本文化史研究 9	17-38頁	

関口　靖之	1988	古代山城国境での疫神祭祀地と主要交通路	歴史地理学紀要30	5-26頁	
関口　靖之	1990	南海道の式内社の地理的分布とその地域的性格	地域と文化 1	1-11頁	
関口　靖之	1991a	明治・大正前期の神社合祀―大阪府旧河内国の場合	日本文化史研究15	124-144頁	
関口　靖之	1991b	大阪府北河内郡における明治・大正期の神社合祀	四条畷紀要 3	13-24頁	
関口　靖之	1991c	明治期の大阪府中河内郡における神社合祀について	大阪府立盾津高等学校研究紀要 2	14-26頁	
関口　靖之	1992	疫神祭祀地と主要交通路―『延喜式』にみる畿内十堺の検討	地理学報28	111-128頁	
関口　靖之	1994a	社寺分布からみた近代の地域的特性―大阪府南河内郡の事例	和歌山地理14	45-51頁	
関口　靖之	1994b	明治・大正期の神社合祀―大阪府旧和泉国の場合	日本文化史研究20	69-89頁	
関口　靖之	1995a	明治・大正期の神社合祀―大阪府旧摂津国郡部の場合	日本文化史研究22	7-27頁	
関口　靖之	1995b	社寺分布からみた近代の地域的特性―大阪府中河内郡を事例として	地理学報30	45-53頁	
関口　靖之	1996a	明治・大正期の神社合祀―大阪府旧摂津国大阪市域の場合	日本文化史研究25	193-200頁	
関口　靖之	1996b	近代大阪市の神社と神社合祀	民俗と歴史27	1-11頁	
（脊古真哉）	1990	遷都の神祇祭祀におよぼす影響について	歴史地理学紀要32	45-58頁	
千田　　稔	1983	行基と地理的「場」	環境文化58		
千田　　稔	1991	→高橋　徹・千田　稔（1991）			
千田　　稔	1994	『天平の僧行基―異能僧をめぐる土地と人々』	中央公論社		
（曽　士才）	1986	雲南大理の龍神信仰と水利慣行	地理31-1		
当麻　成志	1958	丸山教団の発展と土着化過程について	地理学評論31-8		当・松
当麻　成志	1960	天竜河岸の一農村における宗教受容と地域構造の関係	地理学評論33-4		当・松
当麻　成志	1961	日本宗教地理学の提唱	人文地理13-4		松
当麻　成志	1978	宗教と地域社会	地理23-12		
高井　芳樹	1958	宿坊村落崩壊後の立山町芦峅寺	『富山県の地理学的研究 2』（富山地学会）		
高木　秀樹	1981	集落の共有空間―祭祀空間の変容	徳島大学学芸紀要（社会科学）30		
高木　秀樹	1983	阿波渭ノ津の宗教空間構造	徳島大学学芸紀要（社会科学）32		
高橋　　正	1967	地理と宗教―稲垣了俊・P.Deffontaines. Planholの見解を中心として	龍谷大学仏教文化研究所紀要 6		
高橋　　正	1968	防長両国における地神祭について―「風土注進案」の記載を中心として	『藩領の歴史地理』（大明堂）		
（高橋徹）・千田稔	1991	『日本史を彩る道教の謎』	日本文芸社		

(瀧音能之)	1986	古代の日本海と伯耆国宗形神社	歴史地理学132		
田口　雄作	1971	天満天神の信仰圏に関する研究—昭和40年度東京亀戸天神社・学業成就祈願者の地域的分析を通じて	鹿児島地理学会紀要19-1		
武内　和彦	1990	墓と緑	地理35-8	37-41頁	
竹村　一男	1996	末日聖徒イエス・キリスト教会布教の地理学的考察	立正大学大学院年報13	163-185頁	
田中　秀作	1957	北海道の開拓とキリスト教	地理学報 7		
田中　智彦	1981	聖地としての秩父札所	埼玉地理 5		松
田中　智彦	1984	秩父阿熊通りについて	埼玉地理 8		
田中　智彦	1986	近畿地方における地域的巡礼地	神戸大学史学年報 1		
田中　智彦	1987a	『四国偏礼絵図』と『四国辺路道指南』	神戸大学文学部紀要14	41-61頁	
田中　智彦	1987b	愛宕越えと東国の巡礼者—西国巡礼路の復元	人文地理39-6	66-79頁	松
田中　智彦	1988a	大阪廻りと東国の巡礼者—西国巡礼路の復元	歴史地理学142	1-16頁	松
田中　智彦	1988b	石山より逆打と東国の巡礼者—西国巡礼路の復元	神戸大学文学部紀要15	1-23頁	
田中　智彦	1989a	近世の西国巡礼者にみる伊勢参宮	所報・環文研14	12-17頁	
田中　智彦	1989b	西国巡礼の始点と終点	神戸大学文学部紀要16	39-61頁	
田中　智彦	1989c	四国遍路絵図と弘法大師図像	『絵図のコスモロジー（下）』（地人書房）	239-256頁	
田中　智彦	1990a	三十三度行者宿の分布と行者の巡礼経路—住吉組・大仏組の事例	歴史手帖18-7	9-12頁	
田中　智彦	1990b	昭和30・40年代の秩父巡礼—関東地方からの巡礼者	大阪女子短期大学紀要15	13-28頁	
田中　智彦	1991	昭和30・40年代の秩父巡礼(2)—全国からの巡礼者	大阪女子短期大学紀要16	21-37頁	
田中　智彦	1993	近世末，大坂近在の参詣遊山地	『転換期に立つ地域の科学』（古今書院）	88-96頁	
田中　智彦	1995	金刀比羅宮所蔵『金堂寄進帖』にみる摂津国の寄進者	大阪女子短期大学紀要20	71-81頁	
田中　博	1973	文化現象としての四国巡礼	地理18-4,5		
田中　博	1975	神と人間と土地	地理20-8		
田中　博	1981	The evolution of pilgrimage as a spatial-symbolic system	The Canadian Geographer 25		(松)
田中　博	1983	『巡礼地の世界—四国八十八カ所と甲山新四国八十八カ所の地誌』	古今書院		
谷口　輝行	1984	熊野古道と小松原宿の変貌	和歌山地理 4		
千葉　徳爾	1962	民間狩猟の作法にみられる諏訪信仰	信濃14-9		
千葉　徳爾	1963	諏訪の神人について	信濃15-3		
千葉　徳爾	1968	日本の狩猟者によるクマの葬送儀礼	民族学研究32-4		
千葉　徳爾	1969	山の神信仰の一考察—ヲコゼ資料と重出立証法	日本民俗学65		

千葉　徳爾	1976	飛騨川下流域における山の神の祭祀	日本民俗学103		
千葉徳爾・(大津忠男)	1980	近世末期における津軽北部地方の地蔵信仰の形成―過去帳による幼児死亡変動の分析から	東北地理32-1		
千葉　徳爾	1983	濃尾地方における「寺内」の伝承―関ヶ原戦に関して	愛知大学綜合郷土研究所紀要28		
千葉　徳爾	1985	→萩原龍夫・千葉徳爾（1985）			
千葉徳爾・山口昭博	1986	武州御岳御師の旦廻活動―天保期を中心として	歴史地理学132		
千葉　徳爾	1995	両墓制の時空間的展開	駿台史学93	183-194頁	
椿　真智子	1987	法華宗移民における同化過程の考察―米沢藩椿村を事例として	歴史地理学138	14-31頁	松
椿真智子・城戸貴子	1991	秩父両神村における修験の展開と変質	歴史地理学調査報告 5	99-120頁	
鶴藤　鹿忠	1965	新見市千屋の田の神	岡山民俗63		
鶴藤鹿忠ほか 4 名	1973	『中国の民間信仰』	明玄書房		
徳久球雄ほか 2 名	1971	訳：『宗教地理学』（D.E.ソーファー著）	大明堂		
徳久球雄・(吉田国臣)	1978	訳：『宗教の空間構造』（M.シュヴィント著）	大明堂		松
(鳥越憲三郎)	1951	琉球に於ける部落構造の宗教的制約	地理学報 2		
長井政太郎・(工藤定雄)	1967	寺社の在家	歴史地理学紀要 9		
長井政太郎	1972	出羽三山とその宗教集落の盛衰	東北学院大学論集（歴史学・地理学） 3		
中川　正	1983	集落の性格形成における宗教の意義―霞ヶ浦東岸における二つの集落	人文地理35-2		松
中川　正	1988	ルイジアナ州アセンション郡における墓地形態―死の地理学序説	筑波大学人文地理学研究 12	113-138頁	
中川　正	1989	Spatial variation of Ascension Parish cemeteries, Louisiana	Ann. Rept., Inst. Geosci., Univ. Tsukuba 15	4-9頁	
中川　正	1990a	ルイジアナ州における墓上構造物と装飾品	筑波大学人文地理学研究 14	145-168頁	
中川　正	1990b	Cemetery landscape evolution of a Japanese rural community	Ann. Rept., Inst. Geosci., Univ. Tsukuba 16	8-12頁	
中川　正	1990c	文化表象としてのルイジアナ墓地［英文］	地理学評論63B-2	139-155頁	
中川　正	1991a	ルイジアナにおける墓地植生	筑波大学人文地理学研究 15	125-144頁	
中川　正	1991b	北関東の移住門徒集落	『首都圏の空間構造』（二宮書店）	150-157頁	
中川　正	1992	ルイジアナ州における墓標景観	筑波大学人文地理学研究 16	59-80頁	
中川　正	1993	ルイジアナ州における墓地の分布特性―文化集団単位としての墓地	筑波大学人文地理学研究 17	49-68頁	

中川　正	1994a	ルイジアナにおける墓石様式の普及パターン	筑波大学人文地理学研究18	61-80頁	
中川　正	1994b	バイブルベルトの風土	地理39-7	39-44頁	
長沢　利明	1977	東京都檜原村笛吹の両墓制	季刊人類学8-3		
長沢　利明	1979	泙川流域の山神祠	日本民俗学126		
長沢　利明	1990	墓と葬儀の民俗学	地理35-8	50-59頁	
中野　栄治	1978	紀州日高御坊の歴史地理的考察	『歴史地理研究と都市研究（上）』（大明堂）		
中野　栄治	1992	高野政所の歴史地理的考察	和歌山地理12	13-22頁	
長野　覺	1959	宗教集落の一形態—修験道集落英彦山について	地理4-8		当
長野　覺	1979	山岳宗教（修験道）集落英彦山の構造と経済的基盤	駒澤地理15		
長野　覺	1981	日本の山地に形成された入峰道（行者道）の歴史地理的予察	歴史地理学紀要23		
長野　覺	1982	日本の山岳交通路と修験道の入峯について	駒澤大学文学部研究紀要40		
長野　覺	1985	天台修験別格本山彦山派の成立(1)—京都聖護院と九州彦山の本末論争	山岳修験 1		
長野　覺	1986a	修験集団にみる山岳通行（情報・交通）の実態	歴史地理学紀要28		
長野　覺	1986b	日本の山岳交通路としての修験道の峰入り道に関する研究	駒澤地理22		
長野　覺	1986c	山岳交通道路としての修験道の峰入り路	『日本の山村と地理学』（農林統計協会）		
長野　覺	1987	『英彦山修験道の歴史地理学的研究』	名著出版		松
長野　覺	1988	山岳霊場における聖・俗界の諸相—九州英彦山を事例として	歴史地理学紀要30	123-152頁	
長野　覺	1989	日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持(1)	駒澤地理25	51-76頁	松
長野　覺	1990	日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持(2)—紀伊半島・大峰山系の事例	駒澤地理26	67-87頁	松
長野　覺	1992a	日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持(3)	駒澤大学文学部研究紀要50	1-70頁	松
長野　覺	1992b	山岳聖域観に基づく自然護持—信州戸隠山の事例	山岳修験10		（松）
長野　覺	1994	山岳霊場における集落・行場の立地と方位—修験（山伏）集落英彦山について	『方位と風土』（古今書院）	181-203頁	
長野　覺	1995	日本人の山岳信仰と自然保護	法政地理23	3-18頁	
永野　征男	1984	アメリカ合衆国における小宗教集団「アーミッシュ」の地域的展開過程	日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要（地理）19		
永幡　豊	1983	北海道における神社の分布について	北海道地理57		
（中原律子）	1986	中国・甘粛省の子授け信仰	地理31-8		
中俣　均	1979	→諏訪哲郎・中俣均・吉成直樹（1979）			

仲松　弥秀	1961	「お嶽」の本体	沖縄文化 2		
仲松　弥秀	1968	『神と村―沖縄の村落』	琉球大学沖縄文化研究所		
仲松　弥秀	1975	神事による沖縄村落の究明	人類科学27		
(中丸和伯)	1966	分国経済の成立，流通経済の発達―寺内町を中心に	『日本の歴史地理』（大明堂）		
中村　和行	1979	近世伊勢国山田の御師町―下中之郷町	地理学報告（愛知教育大学）49		
南雲　栄治	1977	榛名神社における門前町の復元と変遷について	歴史地理学紀要19		
(西川幸治)	1978	寺内町と自治都市	地理23-5		
西田　和夫	1955	天理市の研究第１報―宗教都市丹波市の発達とその構造	奈良学芸大学紀要4-3		当・松
西田　和夫	1961	天理市の発達とその現状	『奈良盆地』（古今書院）		
西田　彦一	1975	交通路と登拝集落に関する若干の考察―大峰山麓奥吉野の場合	『地域と交通』（大明堂）		松
額田　雅裕	1991	総持寺所蔵「当山境内図」の地理学的考察	和歌山市立博物館研究紀要 6	10-19頁	
野崎　清孝	1973	奈良盆地における歴史的地域に関する一問題―墓郷集団をめぐって	人文地理25-1		
野崎　清孝	1980	長崎県生月島の触とかくれキリシタン組織	奈良大学紀要 9		
野崎　清孝	1993	→藤田裕嗣・野崎清孝（1993）			
(萩原龍夫)・千葉徳爾	1985	山地住民における宗教文化の展開過程の研究（中間報告）	明治大学人文科学研究所紀要・別冊 5		
橋本　征治	1977	近世の砺波地方における神社の広域祭祀圏について	歴史地理学会会報90		
畑　聡一郎	1979	小開発集落の社会生活と祭祀形態	日本民俗学120		
濱上さおり	1994	→木庭元晴・濱上さおり（1994）			
浜田　弘明	1984	近世石仏の地理学的研究(1)～(6)	法政人類学16～21		
林　　正巳	1973	境の神々―境界の地理学的研究(2)	新潟大学教育学部高田分校研究紀要17		
林　　正巳	1978	産業の神々	地理23-12		
林　　正巳	1981	『産業の神々』	東京書籍		
樋口　節夫	1961	縁日と門前町―昔を今に生きる町筋	『京都』（古今書院）		
日向野徳久	1957	下野における近世の農民移動―北陸門徒を中心にして	新地理5-3		当
平井　英一	1971	アメリカの観光産業の過去化現象と日本の神社について	地域研究15		
平井　松午	1980	丹波高地東部における宮座と村落構造	人文地理32-5		
藤岡謙二郎	1948	寺内町の性格	人文地理1-1		松
藤岡謙二郎	1984	『延喜式』式内社と古代の郡・郷分布との関係について	『橿原考古学研究所論集第七』（吉川弘文館）		
藤田　裕嗣	1987	西大寺・秋篠寺相論絵図解読試論	奈良大学紀要16	166-183頁	

藤田　裕嗣	1988	神護寺絵図・高山寺絵図の作成過程	『絵図のコスモロジー（上）』（地人書房）	133-151頁	
藤田裕嗣・野崎清孝	1993	西大寺および周辺の絵図収集と解読試論	総合研究所所報（奈良大学総合研究所）1	115-135頁	
藤曲萬寿男	1972	富士登山道について―その変遷と観光化	『静岡県の自然と人文』（佐々木清治先生御退職記念事業会）		
藤本　利治	1968a	宗教都市の歴史地理学的研究の諸問題	皇學館大学紀要 6		松
藤本　利治	1968b	門前町の形成と社寺の機能―伊勢国山田の場合	歴史地理学紀要10		
藤本　利治	1969	山田御師の活動に現われた近世日本の地域性―師職銘帳の統計的分析(1)	皇學館大学紀要 7		
藤本　利治	1970	『門前町』	古今書院		松
藤本　利治	1978	御師と羽書―近世門前町発達の一背景	『歴史地理研究と都市研究（上）』（大明堂）		
舩杉　力修	1994	近世期秩父における伊勢信仰の展開―吉田町太田部を事例として	歴史地理学調査報告 6	57-65頁	
古川　　清	1952	畿内の式内社	地理学研究小報（立命館大学）4		
（細野昭雄）	1986	カソリックの壁＝メキシコ	地理31-2		
堀　　信行	1982	空間組織の原初形態に関する一考察―人・自然・神	『地域―その文化と自然』（福武書店）		
前本　豊新	1972	吐噶喇列島の民間信仰と村落共同体の研究	鹿児島地理学会紀要20-1		
松井　圭介	1993a	新潟県の宗教空間―寺院・神社・教会の分布を通して	地域調査報告15	143-152頁	松
松井　圭介	1993b	日本における宗教地理学の展開	人文地理45-5	75-93頁	
松井　圭介	1995a	地形条件からみた雷神信仰の地域的展開―金村別雷神社の信仰圏をてがかりとして	宗教研究69-1	177-209頁	
松井　圭介	1995b	長野市における笠間稲荷信仰の地域的展開	地域調査報告17	109-120頁	
松井　圭介	1995c	信仰者の分布パターンからみた笠間稲荷信仰圏の地域区分	地理学評論68A-6	345-366頁	
松浦　一行	1984	栃木県の雷様	宇都宮地理学年報 2		
松尾　達也	1978	風土の中の宗教	地理26-9		
松尾　俊郎	1960	神社にちなむ地名	新地理7-3,4		
松尾　容孝	1989	高山寺絵図のランガージュ	『絵図のコスモロジー（下）』（地人書房）	7-25頁	
松下　清雄	1968	第三次産業地理の基盤としての原始信仰の分析	『人文地理学の諸問題』（大明堂）		
松本　博之	1985	トレス海峡諸島の社会史(2)―キリスト教の布教	愛媛大学教養部紀要18-1		
三浦　鉄郎	1959	六郷城下町（秋田県）の成立と寺院招致	地理学評論32-10		
三浦　鉄郎	1983	出羽三山の地域的性格	地域研究24-2		
三上　正利	1952	康熙時代におけるゼスイットの測図事業	史淵51		
三木　一彦	1994	秩父地域における三峰信仰の受容と展開	歴史地理学調査報告 6	67-79頁	

三木　一彦	1996a	秩父地域における三峰信仰の展開―木材生産との関連を中心に	地理学評論69A-12	921-941頁	
三木　一彦	1996b	外秩父大野村における信仰の展開	歴史地理学調査報告 7	103-116頁	
水田　義一	1978	寺内町の形態再考	歴史地理学会会報96		
水田　義一	1981	寺内町貝塚の変容	和歌山地理 1		
水田　義一	1989	富田林市新堂村の集落プラン―寺内町のプランを導入した村	『日本の農山漁村とその変容』（大明堂）	57-69頁	
宮川　善造	1964	熱帯アメリカにおける太古のジャガー神崇拝	東北地理16-1		
（宮本久夫）	1982	フランス人と宗教生活	地域11		
村上節太郎	1983	四国遍路の道標	愛媛の文化22		
村上節太郎	1984	伊予路の金ぴら道標	愛媛の文化23		
村上節太郎	1986	芸予諸島の芋地蔵の分布	愛媛の文化24		
村上　英雄	1935	本邦宗教分布の研究（神道各派）―附・宗教伝播の地理的制約について	地理学評論11-4,5		（松）
村上　英雄	1957	天理―宗教都市	地理2-10		当
村山　　磐	1987	『エルサレム―風土と興亡の歴史』	古今書院		
村山　　磐	1990	『聖地の地理』	古今書院		
村山　　磐	1992	阿部家伊勢参宮道中記について―寛政六年の資料	東北学院大学東北文化研究所紀要24	11-27頁	
村山　祐司	1982	→山本正三・村山祐司（1982）			
村山　祐司	1990	→山本正三・村山祐司（1990）			
室賀信夫・海野一隆	1955	我が国における仏教系世界図の諸本	仏教史学4-3,4		
室賀信夫・海野一隆	1957	日本に行なわれた仏教系世界図について	地理学史研究 1		
室賀信夫・海野一隆	1962	江戸時代後期における仏教系世界図	地理学史研究 2		
室賀　信夫	1968	神々の遍歴―国土記述の原初形態	『人文地理学の諸問題』（大明堂）		
望月　勝海	1930	地理学的に見たる日本の宗教	地理学評論6-1		（松）
（森　正康）	1985	地域社会における教派神道の受容と定着―山梨県下の禊教	歴史地理学130		
森栗　茂一	1988	河原町の成立について―墓地とケガレの問題から	日本民俗学174	27-53頁	
森栗　茂一	1990	墓場と盛り場	民俗文化 2	213-231頁	
森本　繁幸	1985	神社の地理的研究―朝日町を中心として	黒部川扇状地10		
森谷ひろみ	1971a	安房国式内社に関する歴史地理学的研究(1)	國學院雑誌72-6		
森谷ひろみ	1971b	安房国式内社に関する歴史地理学的研究(2)	国史学86		
森谷ひろみ	1972a	安房国式内社に関する歴史地理学的研究(4)	国史学88		
森谷ひろみ	1972b	安房国式内社に関する歴史地理学的研究(5)	千葉大学教養部研究報告（A）5		
森谷ひろみ	1974	三宅島式内社に関する歴史地理学的研究(2)	千葉大学教養部研究報告（A）7		

八木　康幸	1975	淡路島中部の墓制	地域文化 2	
八木　康幸	1986	近江湖南村落における宮座と象徴空間	人文地理38-2	
八木　康幸	1989	村落墓地の規模について―淡路島を例として	『日本の農山漁村とその変容』（大明堂）	273-288頁
八木　康幸	1990	葬式道・御旅道―村の道の空間論ノート	関西学院史学23	118-132頁
(八木沢壮一)	1990	墓をめぐる世相	地理35-8	60-67頁
矢澤　和宏	1989	大井川流域における水神信仰の地域性	駒澤地理25	115-138頁
安田　初雄	1994	絹本著色恵日寺絵図の歴史地理的考察	福島大学教育学部論集（社会科学部門）56	35-52頁
安田　喜憲	1994	『蛇と十字架―東西の風土と宗教』	人文書院	
藪内　芳彦	1967	『ポリネシア―宗教・土地・住居』	大明堂	
藪内　芳彦	1970	オブスト教授の経済地理学における宗教と経済精神の役割	人文研究21-8	
山口　昭博	1986	→千葉徳爾・山口昭博（1986）		
山口弥一郎	1952a	大頭・小頭とイナバツ―会津恵日寺の稲米儀礼	会津史談会誌25	
山口弥一郎	1952b	『奥州会津恵日寺誌』	磐梯村観光協会	
山口弥一郎	1968	山の神・田の神考―民俗学研究方法論を含めて	亜細亜大学教養部紀要 3	
山田　邦寿	1978	ユタ的職能者と夢に関する一試論	駒澤大学大学院地理学研究 8	
山田　邦寿	1980	宗教的職能者と夢に関する試論―西九州地方の場合	駒澤大学大学院地理学研究10	
山田　道人	1987	成田市における門前町の変容	地理32-9	105-111頁
山田　安彦	1984	古代方位信仰と地域計画	地理29-4	
山田　安彦	1986	『古代の方位信仰と地域計画』	古今書院	
山近　博義	1991	近世後期の京都における寺社境内地の興行地化	人文地理43-5	25-45頁
山近　博義	1994	近世京都における寺社地と市街地形成	奈良女子大学文学部研究年報37	19-36頁
山野　正彦	1974	ムラのなかの小地域集団とカミ信仰―兵庫県三田市母子を事例として	大阪女子学園短大紀要18	
山本　賢司	1994	中世末～近世初頭における市場集落と粉河門前町	和歌山地理14	1-19頁
山本正三・村山祐司	1982	カナダにおける小宗教集団の集落発展および農業経営―マニトバ州のメノナイト集団とハテライト集団を事例として	地域研究23-1	
山本正三・村山祐司	1990	カナダにおける小宗教集団の集落発展および農業経営―マニトバ州のメノナイト集団とハテライト集団を事例として	『アメリカ・カナダの自然と社会』（大明堂）	207-223頁
(吉田国臣)	1978	→徳久球雄・吉田国臣（1978）		
吉成　直樹	1979	→諏訪哲郎・中俣均・吉成直樹（1979）		
吉成　直樹	1983	沖縄久高島における“シマ”の内部体系と神観念	高知大学学術研究報告（人文科学）32	

渡辺　茂蔵	1964	朝日山地の山岳信仰	『朝日連峯』（山形県総合学術調査会）		
渡辺　茂蔵	1973	奥羽山系中部の山岳信仰	東北学院大学東北文化研究所紀要 5		
渡辺　久雄	1979	神社立地の歴史地理学的検討の試み―尼崎市域の神社予備調査を実施して	地域史研究8-3		

注 1 ：配列は，著者の姓の五十音順，同じ著者の場合は発行年順である。

注 2 ：括弧つきの著者名は，非地理学者を示す。

注 3 ：共著の場合は，筆頭著者欄にだけ文献名を記した。

注 4 ：頁数は，『地理学文献目録』第 9 集・第10集掲載分のみ記してある。

注 5 ：備考欄の「当」は当麻論文に，「松」は松井論文に引用されていることを示す。「（松）」は，松井論文に引用されているが，『地理学文献目録』に採録されていないものである。

注 6 ：『地理学文献目録』の誤記など，気づいた範囲でデータを修正・補足した。